

**ARTA**

AUTOBACS RACING TEAM AGURI

DIGITAL

2012



**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI

Project

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
**DIGITAL**  
**2012**

# A New Wind Is Blowing in OKAYAMA

## 岡山に吹いた、新たな風





## ARTA 2012 Rd.1 OKAYAMA

### 「岡山に吹いた、新たな風」

どんなに目を凝らしても、スタートティンググリッドの果ては見えない。  
何十台ものマシンが並び、何百人もの人影が埋め尽くす。  
満員のグランドスタンドでは多くのフラッグが打ち振られ、盛り上がりを見せる。

いよいよ始まる2012年シーズンの幕開け。

その興奮と緊張感が、この山間（やまあい）のサーキットにえも言われぬ熱気を  
帯びさせる。







かつてここでF1が開催されたことを物語るピットガレージ上の色褪せたロゴも、  
**SUPER GT**が運んできた喧噪に掻き消されるように霞んで見える。

岡山国際サーキットにほど近い加賀美・八塔寺の地は、かつて西の高野山と呼ばれた聖地。今も数多くの文化財が残るそんな静謐な山間をも揺さぶる興奮が、**SUPER GT**にはある。

グリッド上でサングラスを掛け、ラルフ・ファーマンはディレクターズチェアに腰を下ろして空を見上げた

昨シーズン、一度も表彰台に上ることができないという辛酸を嘗めたARTAは、**HSV-010**を彼の手に委ねることを決めた。冬の開幕前テストで重ねた走行によって、オレンジ色の**HSV**は見違えるほどに良くなった。7番グリッドに就いたマシンの傍に立ち、監督の鈴木亜久里も自信の笑顔を見せる。







アスファルトの路面には暖かい春の陽射しが降り注ぎ、  
もう昨日までのようない嵐の心配はない。  
晴れ間が覗きながらも時に雨、そして雹（ひょう）までもが降る異様な空は、過ぎ去った。

時計のカウントダウンは進み、最後の調整を済ませたメカニックたちがマシンを離れ、  
いよいよ40台の隊列がフォーメーションラップへと旅立っていく。

そのゆっくりとした1ラップの末に、メインストレートにグリーンシグナルが点灯する。  
轟音の高まりとともに迎える、82周の旅路。



ステアリングを握ったラルフは、7番手のポジションをキープしながら果敢に攻めていく。だが、タイヤに充分な熱が加わるまで、無理は禁物。カーナンバー8のHSVの足下には、ブリヂストンのハードタイヤを履いているのだ。

充分なグリップを引き出す前に無理をさせれば、山間を縫うように駆け抜けるこの曲がりくねったサーキット路面に、タイヤは悲鳴を上げてしまう。ベテランのラルフも、そんなことは百も承知だ。



その頃ピットトレーンでは、GT300クラスの43号車ガライヤがタイヤ交換を始めていた。  
「シグナルが変わったらタイヤを交換します！」  
スタッフのヘッドセットに無線が飛ぶ。

予選でスピンを冒しタイヤを痛めた彼らは、  
安全なタイヤに交換し最後尾から戦列に加わらなければならなかつたのだ。  
最後尾24番手からの追い上げだ。





だが今回のガライヤはストレートが速い。

昨年、圧倒的な猛威を振るったFIA GT規定のマシンたちに対しても、対抗する術はある。ピットを後にしたスタートドライバーの高木真一は、鬼気迫る走りで後方集団を次々とパスしていった。

25周目を迎えた頃、6番手を走っていたラルフが無線でピットウォールに呼びかけてきた。

「タイヤのグリップが落ちてきているんだ。ピットインさせてくれ」

SUPER GTのレースでは、途中で二人のドライバーが後退して300kmの距離を走り切る。そのドライバー交代が許されるのは、レース距離の1/3を走り切ってから。この岡山で言うならば、27周目のタイミングだった。



「今ピットインしちゃダメだ。あと13周は頑張らないと！」

エンジニアの伊与木仁は、冷静に答えた。

「後半を楽にするためには、もうちょっと引っ張らないとダメだよ。  
ペースは落ちてきているけど、周りのクルマも同じようなラップタイムだから」



後半のステイントを担当するのは、小林崇志。

まだ2年目の小林に、長いステイントを任せるのはチームとしても不安が残る。

ましてや、昨年マシンが煮詰められずにあれだけ苦労しただけに、

伊与木としてもラルフにはもう少し頑張ってもらわねばならなかつた。

「走り続けろって言え！」

亜久里も無線で喝を入れた。



一方で順調に順位を上げるガライヤは、28周目にピットインして左の前後タイヤのみを交換してコースへと戻る。

ドライバーは高木から松浦孝亮へと換わる。

「外したタイヤを見たら、摩耗の状況はかなり良いから、最後の10周にプッシュできるよ。これなら絶対いける！」

ガライヤを担当するエンジニアの佐藤真治は、松浦を安心させるように語りかけた。

「タイヤが厳しくなるとしたらリアの方だから、そこだけ気をつけて」

10番手まで浮上してきたガライヤは、まだまだ順位を上げられそうだった。



だがGT500の方のピットガレージは慌ただしさを増していく。

ラルフの無線の声は、いよいよ緊迫の度合いを増してきた。

「前の遅いマシンに引っかかっているんだ。今ピットインしたい！」

トランスポーターの奥にあるプライベートルームで戦況を見守っていた小林も、すでにガレージへと呼ばれて交代の準備は整っている。

「監督、どうしますか？」

そう問われた亜久里は、首を縦に振るしかなかった。



34周目、前を行く36号車と同じタイミングでARTAのHSVはピットへと向かう。小林がコクピットに乗り込み、コースへと飛び出していく。

それから数周のうちに周囲のマシンも続々とピットインを済ませる。その間に同じHSVの17号車に抜かれ、ポジションはひとつ下がってしまった。

「前に引っかかっていたから、本当はあと3周くらい早く入れれば良かったんだけどね……」

マシンを降り、汗だくの髪拭いながらラルフは言った。





気温は僅かに**10度**しかなく、頬に吹き付ける風は冷たい。  
しかし大馬力のエンジンをすぐ傍に抱えるコクピットの中は、  
こんな気候であろうとも灼熱になる。

「リアが少しタレで少しオーバーステアになるけど、  
**100%ブッシュ**できるしグリップの低下も問題はない。  
太陽が出ていれば、ウォームアップにも問題はないんだけどね……」

だがレースの開始から**1時間**が経過し、岡山の空には雲が増えてきた。  
太陽はその力を奪われている。

「タイヤのマネージメントだけ気をつけながら、ちょっとずつペースを上げていこうか」  
伊与木がそう言っても、小林のハードタイヤにはなかなか熱が入らない。



前日のQ2ではそれが上手くいき、僅かに濡れた箇所も残る中で奇跡ともいえる4番手タイムを叩き出しQ3進出を決めた。

しかしアウトラップから8号車HSVのペースは伸びない。

4.8秒だった前とのタイム差は、見る間に広がって僅か3周で12秒近くにまで大きくなってしまった。

「もっとプッシュしろ、ペース上げないと追いつかれるぞ」

「使えるもんは使え！」

繰り返し飛ぶ伊与木からの声色も、厳しさを増していく。



「もっとキツく言えよ！」

亜久里からも檄が飛ぶ。

「サードが3.4秒まで來てる。ちょっとプッシュして！」

「前の柳田のペースも落ちてるから、プッシュしろ！」

「後ろの小暮が4.9秒差、27秒台に入れたぞ、プッシュして！」



伊与木からは前後のマシンとのタイム差が逐次伝えられる。その差は常に変化していく。

周囲のライバルたちも、タイヤの温まりの悪さや、スティント終盤のグリップ低下に難を抱えながらの走行を強いられているのだ。

ようやくタイヤに熱が入りグリップが出始めると、小林のペースは前で優勝争いを繰り広げるマシンたちと変わらないハイレベルなものになっていった。

残り2周、小林は渾身の走りで昨年度の王者、1号車のGT-Rを抜き去って6位を取り戻した。最後にペースを落とした36号車まであと3秒と迫ったが、無情のチェックカーフラッグ。







「ステイントの序盤ペースを上げきれなかったのが非常に悔しい思いです」

そう言って頃垂れる小林に、亜久里は「でも最後に1台抜いて6位まできたところは良かった」と声を掛ける。若い小林も、着実に成長を遂げている。

「クルマはすごく良かった。上手くいけば表彰台も行けたはずだと思う」

ラルフはHSVの仕上がりに手応えを感じながらも、このポジションに満足などしていない。チャンピオンシップ争いを視野に入れて、さらに上を求めている。

ガライヤをドライブする松浦も、タイヤをいたわりながらもしっかりと6位までポジションを上げてチェッカーを受けた。

終わってみれば、HSVもガライヤも6位。

「ピットスタートから6位まであがるなんてなかなか出来ないよ。

ドライバーとエンジニア、メカニックはノーミスで良いレースを魅せてくれたね。次回以降が非常に楽しみになってきたよ」

亜久里は2012年の開幕に、手応えを掴んだ。

去年は「サーキットに行きたくなかった」と言うほどのレースばかりだった。

選手権ランキングでも最下位。だが今年はもう大丈夫だ。

嵐は過ぎ去り、新しい未来がやってくる。

かつての密教の聖地が、エキゾーストノートの興奮に震えたように、

ARTAにも新たな風が吹くはずだ。



## RESULT

● GT500 ARTA HSV-010 N08 : ラルフ・ファーマン / 小林 崇志

| 予選順位 | 決勝順位 | Time/Diff | Best Lap |
|------|------|-----------|----------|
| 7位   | 6位   | 32.165    | 1'24.89  |

● GT300 ARTA Garaiya N043 : 高木 真一 / 松浦 孝亮

| 予選順位 | 決勝順位 | Time/Diff | Best Lap |
|------|------|-----------|----------|
| 13位  | 6位   | 1Lap      | 1'32.061 |

● POINT DRIVER RANKING

GT500 : ラルフ・ファーマン / 小林 崇志 5ポイント 6位

GT300 : 高木 真一 / 松浦 孝亮 5ポイント 6位



**amsc**  
AUTOBACS Motorsports Conference

**AUTOBACS**

**BRIDGESTONE**

**Panasonic**

**Holts**

**Mobil 1**

**Coca-Cola**

**BP vervis**

**Pioneer**

**PHILIPS**

**BOSCH**

**Samantha Thavasa**

**PROSTAFF**  
ENJOY LIFE PRESENTED BY PROSTAFF

**CARMATE**

**CDI**

日東工業株式会社

**PIAA**

**OKAYAMA International Circuit  
岡山国際サーキット**

**SUZUKA CIRCUIT**

**TWIN RING MOTEGI**

**MPF**

**AUG アウグ株式会社**

**ALPINE**

**UNICON**

**WILLSON**

**エーモン**

**エステート**

**FEDERAL**

**m's**

**ELECOM Logitec**

**エンパイヤ自動車株式会社**

**BAL**

**CHASHI CARALL オカモト産業株式会社**

**EVOHO**

**KUMHO TIRES**

**Clarion**

**Crelom**

**JVCKENWOOD**

**新神戸電機株式会社**

**RAYBRIG**

**DUNLOP**

**星光産業株式会社**

**SEIWA**

**CellSTAR**

**SOFT99**

**クリンピュー**

**ダイヤックス**

**COMTEC**

**DENSO**

**TOYO TIRES**

**TB UNIFASHION**

**Trywin**

**NAPOLEX<sup>TM</sup>**

**KNOWLEDGE HOUSE CO.,LTD.**

**Turbo**

**JAPAN OIL SERVICE**

**MARSH CARBON  
HASEPRO**

**PAL STAR**

**ECLIPSE**

**FUJITSUBO**

**BroadLeaf**

**BONFORM**

**マルヨセセブン株式会社**

**MITSUBA**

**MITSUBISHI**

**MIRAREED**

**VAC**

**YOKOHAMA**

**リシレイ**

**RECARO**

株式会社アウトソーシングセントラル

安全自動車株式会社

株式会社イヤサカ

株式会社ウェッズ

株式会社EDIX

Fデザインオフィス

興工業株式会社

コアーズインターナショナル株式会社

株式会社影ユニオン

株式会社サンコー

株式会社サンテック

株式会社ジース・ユアサバッテリー

株式会社湘南レオテック

株式会社幹織

日星工業株式会社

株式会社バンザイ

ブリッド

株式会社ホットスタッフコーポレーション

三菱重工業株式会社

株式会社ユビテル

株式会社ワツ

2012年4月10日現在会員企業

amsc (AUTOBACS Motorsports Conference) とは株式会社オートバックスセブンを中心に、自動車用品関連企業約100社が参加する任意団体であり、モータースポーツを核として「世界中のドライバーを車好きに変える」為に、自動車関連マーケット全体の活性化を目的とした団体です。将来的には、日本のモータースポーツ文化の発展と新たなカーライフ文化の創造に貢献していきたいと考えております。



**Copyright c2012 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication**

**Director and Photographer : Masakazu MIYATA**

**Text : Mineoki YONEYA**

**Design and Web Creator : Akira YOSHIDA**

**Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO.,LTD**